ふたりの叛徒トマス

――9 世紀ビザンツの大反乱をめぐって――

中　谷　功　治

は　じ　め　に

9 世紀 20 年代に勃発したスラヴ人トマスの乱は，数多くの陰謀や反乱に彩られたビザンツ帝国史のなかにあって，ひときわ注目を集める出来事であった。それは 1 年間におよぶ長期の首都包囲戦を含む動乱が，3 年にわたって帝国全土を揺がし続けた点に求められる(1)。さらに，レトリックの色彩が濃厚であるものの，単なる権力闘争ではなく上下の社会階層間での対立が史料において言及されていたため，20 世紀の歴史研究はこれに敏感に反応することになった。とりわけ，第二次世界大戦後に勢いをえたマルクス主義歴史学では，この事件をイデオロギー色の濃い階級闘争史観から描いた(2)。

ただし，戦後フランスにおけるビザンツ史研究の泰斗，P・ルメルルによる

(1) 首都包囲の長期化と反乱の規模では，741 年に勃発したアルタバスドスの反乱が類例として挙げられるが，それ以外にこの反乱に匹敵する出来事は帝国史上ほとんど存在しない。アルタバスドス反乱については，拙著『テマ反乱とビザンツ帝国』（大阪大学出版会，2016 年）の第 4 章 4 節を，さらに根津由喜夫「都を血で穢すのは誰か－ビザンツ中期における権力闘争の作法－」（服部良久編『コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ－紛争と秩序のタペストリー－』ミネルヴァ書房，2015 年，129-149 頁）も参照のこと。

(2) 20 世紀を代表するロシア出身の歴史家 G・オストロゴルスキーも階級対立の要素を加味してこの反乱を叙述した（和田廣訳，『ビザンツ帝国史』（恒文社，2001 年，263-4 頁）。cf. Е. Э. Липшиц, Восстаиие Фемы Славянина, in *Очерки истории византийского обшества и культуры VIII-первая половина XI века,* Москва-Ленинград, 1961, стр.212-28；С. Д. Сказкин（ред.）, *История Византии,* 3 т., Москва, 1967, т.2, стр.72-74.

厳密な史料考証にもとづく論文が 1965 年に発表されると(3)，本反乱のなかに階級闘争を見るような安易な学説は下火となり，その後の欧米諸国の研究においてこの反乱が大きく取り上げることは少なくなっていった。

私は 2016 年春に上梓した『テマ反乱とビザンツ帝国』（大阪大学出版会，第 9 章）において，スラヴ人トマスによる反乱のみに焦点を当てるのではなく，7 世紀後半から 9 世紀前半にかけて小アジアを中心に頻発した地方のテマ軍団による一連の反乱の中でこの大反乱の意味を探ろうと試みた。そこから導かれた結論は，スラヴ人トマスの乱とは最後のテマ反乱であったというものであった。

一方，最近になってスラヴ人トマスの乱の性格について従来にない視角から詳しく検討したのが J・シニェス=コドニェルである。2014 年刊行の『皇帝テオフィロスと東方：829-842 年』(4)は，副題の「イコノクラスム最終局面のビザンツにおける宮廷と辺境」からも明らかなように，その主たるテーマはトマスの乱を終結させたミカエル 2 世の息子テオフィロス帝下の帝国政府と東方国境地域に設定される。ビザンツから見た東方地域，つまりメソポタミアを中心としたイスラーム圏にアルメニア・グルジアなどの南コーカサスを加えた領域は，9 世紀になって史料での情報量が増加し，その錯綜した情勢について検討が可能となってくる。シニェス=コドニェルは，トマスの乱を自著の中心課題の前史として東方の諸民族の動向の観点から再解釈を試みたのである。

ここで注目しておきたいのは，シニェス=コドニェルが従来にないユニークな学説，「ふたりの叛徒トマス」説を提示したことである。加えて，彼はこの時期のビザンツ史研究に不可欠の史料である『続テオファネス』の校訂本および英語翻訳の共著者をつとめている(5)。シニェス=コドニェルの所説は大胆で

(3) P. Lemerle, Thomas le Slave, *Travaux et Mémoires* 1, 1965, pp.255-297.

(4) J. Signes Codoñer, *The Emperor Theophilos and the East, 829-842 : Court and Frontier in Byzantium during the Last Phase of Iconoclasm,* Farnham, Surrey/Burlington, VT, 2014. 本稿に関係するのはおもに 12 章。

(5) M. Featherstone & J. Signes-Codoñer（eds./trs.), *Chronographiae Quae Theophanis Continuati Nomine Fertur Libri I-IV*（以下 *Theophanes Continuatus* と略記), Berlin/Boston, 2015.

はあるものの，『続テオファネス』に加えて同じく 10 世紀に編纂され，スラヴ人トマスの乱について詳しい情報を提供する史料，ゲネシオスの『皇帝列伝』など主要史料をフルに活用，検討した上での結論である。

残念ながら拙著において，このシニェス=コドニェルの説について詳しく取り上げられず，註釈で簡単に批判するにとどまった。そこで本稿においては，関連する史料の記述を比較した上で，この反乱の性格についてあらためて検討することにしたい。

1. スラヴ人トマスの出自と反乱の開始時期

まず，スラヴ人トマスの経歴について確認しておこう。ここではトマスは 2 名存在したのかどうか，シニェス=コドニェルが主張する「ふたりのトマス」説を検討するために，「スラヴ人」という従来のあだ名はいったん棚上げにして，仮に「軍人トマス」と「逃亡者トマス」と両名を区別して以下記述していくことにする。

最初は「軍人トマス」，つまりルメルル説によるなら本物のスラヴ人トマスの経歴から。

年代順でいくと，彼が史料上に登場するのは西暦 800 年頃，アナトリコイ軍団の将軍で「トルコ人」とのあだ名をもつバルダネスにつき従う腹心としてである(6)。

ただし，1 世紀以上後に編纂された歴史書である『続テオファネス』とゲネシオスの『皇帝列伝』が伝えるのは，皇帝位をめざす将軍バルダネスがフィロ

---

(6) *Theophanes Continuatus,* I.1（p.14.13-15）; 2（pp.15-16）; A. Lesmüller-Werner & H. Thurn（eds.）, *Iosephi Genesii Regum libri quattuor*（以下 *Genesios* と略記），Berlin/New York, 1978, I.6（pp.6-7）. なお，軍団および軍団が管轄する領域の両方を意味するテマについては，さしあたり拙稿の序章を参照。バルダネス・トゥルコスは，この時期の帝国における最上位の将帥であった（拙稿第 9 章 297 頁）。なお，この伝説については，翻訳文をもまじえつつ同書 295-6 頁で紹介した。

メリオンの隠修士を訪問し，自身の帝位獲得について予言を受けるという伝説色の濃い逸話であり，にわかに事実とは信じられない。ただそれでも，ここでの軍人トマスは，アルメニア人レオン（後のレオン 5 世）やアモリオンのミカエル（後のミカエル 2 世）とともに登場しており，バルダネスの腹心であったであろうことは推察される。

以上に続くのは 803 年に勃発したこのトルコ人バルダネスの反乱においてである。大軍をもって首都対岸に押し寄せたバルダネスの反乱軍であったが，上記のレオンとミカエルは皇帝ニケフォロス 1 世の側へと裏切る(7)。この反逆もあってバルダネスは反乱軍の陣営から密かに離脱し，修道院へと隠遁した。両史料記述によると，裏切り者の 2 人とは異なりトマスは最後まで主人のバルダネスにつき従った(8)。

この後，軍人トマスはイスラーム圏へと逃亡したのか，しばらく史料には登場しない。久しぶりの登場となるのは 813 年にアルメニア人レオンが皇帝位についた直後の記述である。『続テオファネス』，ゲネシオスともに，即位したレオン 5 世はトマスをフォイデラトイの師団長（トゥルマルケス，かつてレオン自身がバルダネス反乱後に占めたポストで，アナトリコイ軍団のナンバーツー）に任用したとする(9)。そして，この次に軍人トマスに言及があるのは，820 年の冬，反乱蜂起の時となる（次章で詳しく検討する）。

一方，「逃亡者トマス」は以上とはまったく異なる姿で登場する。その情報の最古のものは，ミカエル 2 世が息子で共同皇帝であるテオフィロスとの連名でフランク王国の君主ルートヴィヒ敬虔帝に宛てた書簡である。そこでのトマス関連の記述は以下のとおり。

---

(7) *Theophanes Continuatus,* I.3（pp.16, 18）；*Genesios,* I.8（p.8）. なお，バルダネス反乱については同時代に編纂された『テオファネス年代記』にも記述がある（C. de Boor（ed.）, *Theophanis Chronographia,* vol.1, Leipzig, 1883, p.479）。cf. W. E. Kaegi Jr., *Byzantine Military Unrest,* 471-843, Amsterdam, 1981, pp.245-7.

(8) *Theophanes Continuatus,* I.3（pp.18.26-27）；*Genesios,* I.8（p.8.54-55）.

(9) *Theophanes Continuatus,* I.12（pp.38.5-6）；*Genesios,* I.11（p.9.95-96）.

「さて，われらが前に帝権を占めたレオン（5 世：カッコ内は中谷による補足。以下同様）の治世に，トマスという名の古き悪魔の弟子にしてその仕事の遂行者が現れた。彼はエイレネが帝権を占めていた時（797-802 年）に，最も卓越したパトリキオス（爵位保有者）たちのある者に仕えていたが，その主人に対し犯罪をなした。すなわち，主人の妻と寝床をともにしたのである。このことが発覚すると彼は判決を受けることを恐れてペルシア人（＝アラブ人）の所へと逃亡した。彼はそこで上述のエイレネの治世から上述のレオンの治世まで滞在し，サラセン人や他の民族の多くの不信心者たちを，きわめて巧みに自らの味方へと引き込むようキリストの信仰を否認し，こうしてキリスト教の裏切り者となった。そして彼は彼らに次のように説いた。自分はしばしば言及されている女帝エイレネの息子コンスタンティノス（6 世）であり，自分の代わりに別の者が視力を奪われたのであって，自らは視力喪失を無事に逃れたのだと。このようにして先に述べたことにより，諸民族は彼につき従った。まず彼が始めたのは彼らともに略奪をすることで，また別の者たちは力づくで自らの味方とし，またある者たちは金銭を与えることで，ある者たちは名誉と爵位の約束によってそそのかした。そしてこれらを手短に述べると，トマス自身はサラセン人，ペルシア人，イベリア人，アルメニア人，アブハジア人そしてその他の異民族とともに突如ペルシアから出て，このような強力な軍勢で戦いを始めた」(10)

書簡はさらに続けて，混乱に対処しえなかった皇帝レオン 5 世が暗殺され，彼のかつての同僚であるミカエル（2 世）が即位し，その後反乱がコンスタンティノープル包囲戦をへて鎮圧されるまでの経緯が語られる。

本書簡はラテン語版（つまり受け取り側）が残るのみだが，同時代の第一級史料であることにまちがいない。ただし，皇帝政権の公式見解となるものだけに，その内容には新帝ミカエルにとって不都合なことはいっさい記されていな

(10) A. Werminghoff (ed.), *MGH.,* Legum sectio III : Concilia tome II, pars 2, Hannover/Leipzig, 1908, p.476.

い。たとえば，レオン帝暗殺に先立ちミカエルが簒奪陰謀の咎により逮捕されて監禁中であったとか，長期の反乱が皇帝側の勝利に終わった要因にブルガリア軍の支援があったことに言及はない。さらに，長期間の首都包囲戦の事実からも明らかなように，小アジアを中心とする多数のテマ軍団が反乱に加担した（海のテマ，キビュライオタイを含む）ことも無視されている。結局，ミカエル 2 世の書簡では，不名誉な逃亡者のトマスが四半世紀後に前の皇帝の名前をかたり，東方の異民族を糾合して帝国に侵攻したというのが主要な内容となる。この書簡では，事件の国内反乱の要素は背景に隠れたままなのである。

以上見てきたように，史料での記述からは「軍人トマス」と「逃亡者トマス」の間に接点があるようには思えない。そこでシニェス=コドニェルは，従来の研究史では想定されたことのなかった，トマスが 2 人いた（「軍人トマス」と「逃亡者トマス」は別人）という大胆な説を提示したのである。

書簡の記述にはもうひとつ注意したい点がある。それは，トマスの攻撃はすでにレオン 5 世治下に始まっていて，それへの対処を誤ったため皇帝は暗殺されてミカエルの即位につながった，として現政権が正当化されていることである。

従来はルメルルの研究を受けて，トマスの乱はミカエルによる帝位簒奪に反抗して勃発したというのが通説であった。ところが，最近になって反乱はレオン 5 世暗殺の結果ではなく，書簡にあるように先帝の末年に起こったとの説が提示されている(11)。「ふたりのトマス」説をとなえるシニェス=コドニェルも，同じく反乱はレオン治下に始まったとの新説に賛同する。

自説を補強するため，彼は他の史料の内容を吟味する。まず，編纂年が事件に近いミカエル 3 世治下（842-67 年）とされる修道士ゲオルギオスによる年代記，いわゆる『ゲオルギオス年代記』がある。この年代記の中でトマスの乱はミカエル 2 世の項目に登場するのだが，その内容はトマスがかつて帝国を見捨ててシリアに至り，そこで皇帝コンスタンティノス 6 世を僭称して多く

(11) D. E. Afinogenov, The Conspiracy of Michael Traulos and the Assassination of Leo V : History and Fiction, *Dumbarton Oaks Papers* 55, 2005, pp.329-338.

の蛮族たちとキリスト教徒を欺いて帝国に攻め入った，とミカエル 2 世の書簡に類似したものとなっている(12)。

それゆえシニェス=コドニェルは，反乱記述の冒頭部分にある「彼のもとで」を，通説でのミカエル帝と読むのではなく，その箇所の近くに登場するレオン帝と読むのが適切だと主張した(13)。けれども，『ゲオルギオス年代記』の記述は，9 世紀後半から 10 世紀中頃にかけての詳しい情報を提供する『シメオン・マギストロス・ロゴテテス年代記』と文言がほぼ同一であり，そこでの「彼のもとで」はミカエル 2 世としか読めない(14)。

さらにシニェス=コドニェルは，記述での神がかった内容や編纂の時期などの点で信憑性に問題のある聖人伝関連の史料をも検討する。

まず，成立年が事件直後の 832 年頃で後の総主教メソディオスの手による「サルデスのエウテュミオス伝」には，「叛徒は，私はもっとも恐るべきトマスのことを言っているのだが，すでに彼（ミカエル 2 世）より前に蜂起していたが」(15)とある。やはり反乱はミカエル即位前に始まったとされている。ただし，関係する記述は数行程度で，しかも反乱について具体的な記述は一切ない。

続いて最終編纂は 11 世紀以降とずっと後だが，具体的記述があるのが「レスボス島の聖ダヴィド，シメオン，ゲオルギオスの事績」である。そこでの記述は次のようなものである。

「先に言及したミカエル（2 世）が帝権を支配していたとき，キリスト教徒たちに大きく困難な悪しきことが大地から生じた。それは暴君レオン（5

(12) C. de Boor（ed.）, *Georgii Monachii Chronicon,* 2 vols., Leipzig, 1904, rep.1978, p.793.

(13) Signes Codoñer, *The Emperor Theophilos and the East, 829-842,* p.191.

(14) S. Mahlgren（ed.）, *Symeonis Magistri et Logothetae Chronicon,* Berlin/New York, 2006, 129（pp.214-215）. ただし，編纂年は『シメオン年代記』の方が後なので，「彼」がミカエル 2 世であるとは断定はできない。

(15) J. Gouillard, La vie d'Euthyme de Sardes（+831）, une oeuvre du patriarche Méthode, *Travaux et Mémoires* 10, 1987, pp.1-101, ch.10.204-5（p.37）.

世）が人々の間でまだ生きているときにすでに始まったのだが，ミカエルの時期にキリスト教徒への災難として発展した。それはトマスであったが，彼は至福なるエイレネの時にプロトストラトル（馬丁長官）やアナトリコイ将軍でトルコ人と呼ばれる人物に仕えたが，自分が犯した恥ずべき不適切な乱暴行為のために，恐れて祖国を離れ，信仰と主を棄ててイスマイル（アラブ）人へと逃亡した。ニケフォロス帝の治世に彼はそのように振る舞い，同様にスタウラキオス，ミカエル（1 世），そして暴君レオンの治世の大半でもそうした。しかし，彼（レオン）の終わりに，彼は策謀と贈物によって軍隊を集め，サラセン人たちにはローマ人を彼らに服属させると約束して，いわゆるアルメニアコイのテマ領域に出現した」(16)。

以上は，おおむねミカエル 2 世書簡の内容を継承したものといえるだろう(17)。このようにしてシニェス=コドニェルは，反乱のレオン 5 世治世末の発生を補強した。

反乱勃発時の状況については，注（11）で挙げたロシア人研究者アフィノゲノフの論文をも検討する必要があるが，議論の関係上ここではトマスの乱の開始時期そのものの検証はひとまず置いておく。以下では「ミカエル 2 世の書簡」同様，トマスの乱の全貌を復元するために研究者たちが活用してきた主要史料である『続テオファネス』とゲネシオスの『皇帝列伝』の記述内容について詳しく検討することにしたい。

---

(16) I. Van den Gheyn（ed.）, Acta graeca SS. Davidis, Symeonis et Georgii Mitylenae in insula Lesbo, *Analecta Bollandiana* 18, 1899, pp.231.22-232.10. cf. D. Abrahamse & D. Domingo-Forast'e in A.-M. Talbot（ed.）, *Byzantine Defenders of Images. Eight Saints' Lives in English Translation,* 1998, Washington DC., pp.188-9.

(17) さらに「アモリオンの 42 聖人の殉教」のヴァージョン Z も同様だという。cf. Signes Codoñer, *The Emperor Theophilos and the East, 829-842,* pp.42-44 ; В. Васильевский и Р. Никитин（ред.）, Сказания о 42 аморийских мучениках и церковная служба, *Записки императорской академии наук по историко-филологийческому отделению,* VIII. сер., том 7, но.2, Санкт- Петербург, 1905, 64.26-28.

2. 主要史料記述の検証

ここまで，スラヴ人トマスの乱についての情報を提供してくれる史料を随時紹介してきたが，実際のところその情報量において他の追随を許さないのが事件後1世紀をへて編纂された2つの歴史書，ゲネシオスの『皇帝列伝』と『続テオファネス』である。この反乱に関連する記事がゲネシオスで約7ページ，やや冗長の感のある『続テオファネス』では10ページ以上残されている（ともに同じシリーズの校訂本）。これら2つの史料は10世紀の文人皇帝コンスタンティノス7世（在位913-59年）によって編纂が命じられた。その内，『続テオファネス』の第5巻「バシレイオス1世伝」はこの皇帝みずからが筆をとったことで知られる(18)。ただし，両史料が並立して存在している理由やその前後関係などについては，種々議論はあるものの最終決着は見ていない(19)。

ここで注目したいのは，ゲネシオスの『皇帝列伝』と『続テオファネス』の両方が，トマス反乱の前史，すなわちトマスの出自や反乱の原因・性格について互いに矛盾する2つの異本を併記していることである。かつて研究者たちはこられ2つの異本の整合性をはかることに苦心したが，ルメルルは彼が「小アジア本」と呼ぶ方（ヴァージョンB）をある程度事実を反映したものとして重視する一方，もう片方のヴァージョンA（ルメルルが「シリア本」と呼ぶもの）についてはその大半は政治プロパガンダのための言説として内容を否定した。これに対しシニェス=コドニェルは両方のヴァージョンでの記述を

(18) I. Ševčenko（ed./tr.），*Chronographiae Quae Theophanis Continuati Nomine Fertur Liber Quo Vita Basilii Imperatoris Amplectitur,* Berlin/New York, 2011.

(19) たとえば，F. Barišić, Les sources de Génésios et du Continuateur de Théophanes pour l'histoire du régne de Michel II（820-829），*Byzantion* 31, 1961, pp.257-271；idem, Две верзије у изворима о устанку Томи, *ZRVI* 6, 1960, pp.145-169［Deux versions sur Thomas, chef de l'insurrection de 821-823, pp.166-168］などを参照。さらに最近では，W. T. Treadgold, *The Middle Byzantine Historians,* Basingstoke/New York, 2013, chapter 5がある。

尊重し，これらは元は別個の 2 人のトマスに関する情報を反映したものと考えた。

以下では，2 つのヴァージョンについて内容を詳しく見ておくことにしたい。

まずはヴァージョン A（ルメルルの「シリア本」）について。『続テオファネス』は，それに先立つ第 2 巻 9 節で内乱発生の冒頭で次のように記している。

「この時に同族での戦い（内乱）が東方から始まり，世界をあらゆる種類の邪悪さで満たし，多くの人間を少数にした。すなわち，父親たちは息子たちに対して右手に武器を持ち，兄弟たちは同じ胎内から生まれた者に対して，そしてついには友人が最愛の者たちに対抗した。彼らの指導者はトマスであったが，彼については 2 通りの話が語られている。これほど多くの時間が経過したので，人間である我々は目撃ではなく伝聞によりそのような歴史を把握しなければならない。実際，あらゆる手だてを用いて保たれた真実を我々が手にするためには，我々はこのような話だけではなく，別途伝えられた話をも記録すべきである。我々に提示された仮説をこのように台無しにする不確実さや欺瞞ではなく，むしろ，このようにではなく，あのようなものだと永遠に議論する人々の方により確実なことは存在するのだから。というのも，真実がありのままで，我々人間がいかなるヴェールもなく全部を知っている，というのが最善であろうから。けれども，まるで覆いか何かが我々に被さるように，流れた長い時間が知識を貧弱なものとするがゆえに，我々は忘却の川であるレーテにすべてを委ねるのではなく，信頼される事実を伝聞や噂によって何としても光の中へと導かねばならない。」

（『続テオファネス』第 2 巻 9 節，p.77）

これに続くのがいわゆるヴァージョン A の記述である。

「そこで，ひとつの最初の話によると，私は書かれたもののなかでそれが信頼できると確信するのだが，このトマスは名もない貧しい両親から，あるいはしばしば東方へと向かったスラヴ族たちから生まれたという。こうして貧困に暮らしつつも，運命に賭けて彼自身の（故郷）を棄て，かの大都市（コンスタンティノープル）へと入った。そして，ある元老院身分の人物に補佐し仕えるため付き従ったが，放縦さのために急ぎ主人の寝所と彼のベッドを侮辱した。こうして捕らえられると，大いなる恥辱とそれによる懲罰に耐えられなかったので，ハガルから生まれた者たち（アラブ人）のところへ逃亡し，自分への十分な信頼をすでに長年にわたって－というのもおよそ 25 年目が過ぎたので－適切な活動と我らの神キリストを否定することから彼らに与えて，ある戦闘部隊の指揮者となってキリスト教徒たちと戦う支度をととのえ，もっとも強力な手によってローマ人の皇帝権を彼ら（イスラーム教徒たち）の手に服従させると約束した。そして途中のローマ人たちのところで誰も刃向かうことなく，自分に味方して危険を冒してくれるように自分はエイレネの息子のコンスタンティノス（6 世）であると名乗った。この人物はかつて無分別と習慣の残酷さのために両目とともに帝権を奪われ，その後に生涯を終えたのだが。活動の大きさとそれを育む希望によって物事のパートナーが必要であった。というのもそれなしでは陸と海とで勝利するとは思えなかったので，彼は養子をとったが，その者の体型からは魂の狂気は明らかであった。彼に十分な兵力を授けてコンスタンティオスと改名させ，ローマ人の地を彼に（自分とは）異なる仕方で攻撃し略奪するよう命じ，自分自身も別途そうした。この時アルメニア人レオンが帝権の手綱を握っていたが，末期であった。この人物は彼（トマス）に対しそれに値する軍勢を組織せず誤りをなした。というのも（その軍勢は）面と向かって対峙するとすぐに逃亡したので，彼は自信過剰となり，自分についてより大きく考えることになった。そして以上がかの動乱と反乱の始まりについての最初のそして広まっている話である。」

（『続テオファネス』第 2 巻 10 節，pp.76-77）

以上と類似する内容が，ゲネシオス『皇帝列伝』のミカエル 2 世の治世を扱う第 2 巻 4 節に登場する。

「トマスについては，次のようにより正確に調べられていると言われる。実際にこの叛徒は卑しい地方の出身で不確かな運命にあって，生きていくための必要から皇帝が統治するコンスタンティノスの町（コンスタンティノープル）へ赴いた。そしてあるパトリキオス，それはバルダネスだったと言われる，に結びつけられたが，この男によって姦通の咎で捕らえられた。そのことを当時帝権を手にしていたニケフォロス（1 世）がなすように命じたのである。それは彼自身（バルダネス）にそなわった高貴さを妬んでのことであった。彼は姦通の試みをなしたのであって，行為には及んでいなかったので，裁判を免れてシリアに逃亡した。そしてまずキリストへの信仰を棄てて，そこで長い時間を過ごしたが，ほぼ 25 年がすぎると自らに偽りの噂を流した。自分はレオン（4 世）とエイレネの（息子）コンスタンティノス 6 世であると主張して。しかし，その者は性格の邪悪さのために両目とともに帝権を失い，そして失脚後少したって人々から消えた（死んだ）のであり，その亡骸はこの時にひとつの棺で帝都の聖なる土地に埋葬された。だがこの殺人者の男はサラセン人たちとともに暮らし，彼らを輝かしい約束で説得した。もしも，彼らがこの行為のために自分に十分な金銭と優れた軍隊を授けてくれるならば，ローマ人の権力を彼らに従わせると。そしてこの要求が認められると，ただちに彼はローマ人に向けてまっしぐらに進軍した。けれども企てたことの大きさゆえに，彼は半蛮族のある男を見つけて息子とした。精神の卑しさと愚かさとさらに身体の醜さとともに他のことで不幸であったが。この者がコンスタンティオスと呼ばれることを許し，サラセン人たちの部隊を彼に与えて，この人物とともにローマ人の地を侵略した。これらの時にレオンが皇帝であった。彼はパトリキオス位のバルダスの息子で，アルメニア人の出であったが，このローマ人たちにとっての災いを大いに注意するに値するものとは思わず，無造作に軍隊の小さな部隊を編成し，将軍という

よりむしろ指導的兵士に託してトマスに対して派遣した。そして両方の軍隊が互いに東方のある地で激突し，皇帝軍が敗退して逃亡した。恐れるものがなくなった反逆者は全東方を進撃して，自分の勢力に合流させた。」

（ゲネシオス『皇帝列伝』第 2 巻 4 節，pp.25-26：なおこの後，記述は第 5 節の冒頭の「そのすぐ後にミカエルがレオンを殺害し，帝位に登った」と続く）

以上 2 史料のヴァージョン A をミカエル 2 世の書簡の内容とともにまとめると表 1 のようになる。要するに，『続テオファネス』とゲネシオスの『皇帝列伝』の記述内容の大部分は一致しており，さらにその多くの情報は書簡と同じである。25 年とはエイレネの統治開始（797 年）から反乱開始（820 年）までの年月とおおむね重なる。

表 1

記載内容	ミカエル書簡	『続テオファネス』	ゲネシオス
より確実な伝承（経歴）		○	○
トマスは卑しく貧しい出自		○	○
スラヴ系である			○
上京と有力者に仕える＊	○	○	○
主人の妻との姦通（未遂）	○	○	○
イスラーム圏への逃亡（25 年）	○	○	○
キリスト教を棄教	○	○	○
部隊を指揮して帝国に侵攻	○	○	○
コンスタンティノス 6 世を僭称	○	○	○
養子コンスタンティオス		○	○
レオン 5 世の統治下での侵攻開始	○	○	○
皇帝の対応での誤り	○	○	○

＊書簡：パトリキオスにエイレネ治下；『続テオファネス』：元老院議員；ゲネシオス：パトリキオス位のバルダネスにニケフォロス 1 世治下

なお，シニェス=コドニェルは後世の他史料も含めて，編纂者たちが皇帝の書簡を見る機会はなかっただろうから，証言の一致は事実に近いための結果であると主張する。けれども，表 1 の内容はおそらく皇帝政府の正式見解であ

り，広く喧伝されたと考えるなら，証言の一致はさほど不思議なことではないだろう。

続いてヴァージョン B（ルメルルの「小アジア本」）の内容を紹介する。まずは『続テオファネス』での記述から。第 2 巻の 10 節（ヴァージョン A）に続く 11 節。

「別の言い伝えは，名前についてはトマスであると違えないが，彼はかつてバルダニオス（トルコ人バルダネスのこと）とともにあり，統治することになったレオン（5 世）によって栄誉を与えられて，彼はこの時にフォイデラトイ（師団）の指揮権を統括，アナトリコン（アナトリコイ・テマ領域）に滞在した。ミカエルがレオンを殺害したと聞くとすぐに復讐して自らの怒りを満たして－というのも，同僚であったはるか以前からこの人物とは何かと対立しており－同時に彼についての予言を恐れてもいたので対抗の手勢を動かした。そしてその手勢は小さくも弱くもなく，勇敢で男らしく若々しく，槍を振るう力のある年齢の者たちのすべてが彼とともにあった。というのもミカエルは何らかの理由で，あるいは別の仕方で全ての者に嫌われていた。というのも，すでに述べたように，彼は以前からアティンガノイ[20]の邪悪な異端に加わっていたからで，もたつく舌を持ったために臆病と軟弱さで評判であったからでもあり，さらに彼の魂は彼の舌と同じく不自由なもので，多くの者たちによって嫌悪され重荷とみなされていた。一方のトマスは，足が不自由で出自は蛮族であったが，白髪で尊敬され，愛想の良さと軽妙さがどうやら子供の頃から備わっていて，実際兵士たちはそのようなものを好み，彼はいっそう愛されて，また身体の高貴さにおいて誰にも引けを取らなかった。この者は公税を集める者たちを自分の側とし，寛大な贈り物で自分

---

(20) cf. I. Rochow, Die Häresie der Athinganer im 8. und 9. Jahrhundert und die Frage ihres Fortlebens, in H. Köpstein & F. Winkelmann（eds.）, *Studien zum 8. und 9. Jahrhundert in Byzanz,* Berlin, 1983, pp.163-178 ; Steven G. Bowman, *Oxford Dictionary of Byzantium,* Washingotn DC, 1991, vol.I, p.223 ATHINGANOI.

に従う者たちを多くしようと尽力した。少数から多数となり，最小の手勢から大勢力となった。というのも，新たな事態や富裕化を望む者が加わるように，ある者たちを説得と何らかの友誼により導き，またある者たちは力でもって従えた，すでに同族反乱の悪しきことが試みられることになった，とのその者たちの意志に反して。こうして同族の戦い（内乱）が開始されて，ナイルの急流のように始まって台地に水でなく血が流れた。それゆえ，奴隷は自分の主人に対し，兵士は将校に，百人隊長は将軍に殺害の手で整ぞろいしたので，（小）アジア全体がうめき声を上げて沈むまでに至った。というのも諸都市の者たちは男たちともども恐怖のために説得されてトマス側についたが，ときに抵抗する者たちは統治者に忠誠を守ったが，多くの殺戮と奴隷化をもって第2の者たち（トマス側）に服従した。いずれにせよ全（小）アジアが彼の後に続いた。カタキュラスが指揮をとるオプシキオン（軍団）とアルメニアコイ（軍団）のオルビアノスを除いて。というのも，これらの将軍たちだけがミカエルに忠誠を維持したと見られたから。」

（この後，さらに支持者を増やすためのトマスによる減税措置についての記述が続く）

（『続テオファネス』第2巻11節　pp.78, 80」

なお，続く第12節では，帝国の内乱につけ込んだイスラーム側の帝国侵攻の動きを察知したトマスが，逆にシリアに攻め込み，イスラーム側と和平を交渉し，さらにアンティオキアの総主教ヨブによって皇帝に加冠されたとある。

そしてその地においてトマスに援軍が加わり，それら諸民族の名前が列挙される。すなわち，アラブ人，エジプト人，インド人，ペルシア人，アッシリア人，アルメニア人，カルデア人，イベリア人，ゼヒ人，カベイロイ，マニ教徒，その他すべてである[21]。

---

(21) 民族名の列挙はミカエル2世の書簡にあったが，そこでは「サラセン人，ペルシア人，イベリア人，アルメニア人，アブハジア人そしてその他の異民族」であった。

次にゲネシオスでのヴァージョン B。こちらはヴァージョン A より先の第 2 節。

「言われるところでは，トマスはミカエルが皇帝となったと耳にすると，即座に彼に対して大軍での反乱を企てた。というのも最初から互いに対立していたからである。ミカエルはアナトリコイ軍団の全体から嫌われており，それに劣らず自分の生まれ故郷ゆえに（多くのアティンガノイが成長していたようであるので）非難されたが，また会話が劣っていることからも男らしさの点で十分ではないと思われていた。一方，トマスは少なくない勇敢さ，そして愛想の良さと軽妙さで全ての者に愛された。彼は民族においてスキタイ系であり，高齢で片足が不具であったにせよ，最上の者たちの中でレオンに劣ることはなかった。さてこの者は要求された公税のすべてを差し押さえ，書面にて慣例的な取り立てを割り当て，それらを人々に厳格に配分してミカエルに対抗する軍隊を編成した。東方出身の者たちで，そしてまた西方からの者たちも，彼に与しない者は誰もいなかったし，異国からやってきた者たちも，本国の者たちも，近隣に住む者たちも，主人を憎むどんな隷属身分の者も，諸民族の全体も，様々な時に彼に対抗することなく従った者たちは，ある者は陸上で戦い，またある者たちは海上で戦った。同じ信仰をもつ者たちにおいてではあったが，彼は新たなクセルクセスのようであった。そしてそれゆえ，全てのテマ軍団は将軍たちとともに同盟して彼の側についた。ただアルメニアコイ軍団を指揮するオルビアノスとオプシキオンの（軍団の司令官）カタキュラスが，戦いの知識により確信をもって皇帝ミカエルに味方した。」

（第 2 巻 2 節，pp.23.80-24.7）

第 2 節の記述はまだ続くが，そこで語られるのは『続テオファネス』の第 12 節の内容と同じで，イスラーム側の動向とトマスの対抗措置と和平，さらに現職皇帝に対抗する同盟とアンティオキア総主教ヨブによる戴冠へと続く。

そしてトマス軍に加わった民族名の列挙となる。すなわち，イスラーム教徒，インド人，エジプト人，アッシリア人，メディア人，アブハジア人，ジキア人，イベリア人，カベイロイ，スラヴ人，ヴァンダル人，ゲタイ，マニに加担する全ての者たち（パウロ派），ラズ人，アラン人，カルデア人，アルメニア人である[22]。さらに帝国内での戦闘（バルカン半島側への移動と首都包囲戦）へと話題は移るが，こられは省略する。

以上の『続テオファネス』とゲネシオスの『皇帝列伝』からのヴァージョンB の情報をまとめると次の表 2 のようになる。

表 2

記載内容	『続テオファネス』	ゲネシオス
バルダネス（バルダニオス）の従者	○	
レオン 5 世により爵位・フォイデラトイ師団長	○	
アナトリコイ領域でレオン殺害を知り蜂起	○	○
ミカエル 2 世との不和と彼の不評	○	○
トマスは足が悪い	○	○
蛮族的出自（スキタイ系）	○	○
トマスの評判	○	○
味方の集結：説得と報償	○	○
具体的な支持者と民族の列挙	○	○
アンティオキア総主教によるトマスの戴冠	○	○

こちらも，一部に重ならない情報が残るものの，両史料の記述内容はほぼ同じだといってよいだろう。

（なお，ゲネシオスも，バルダネスの従者トマスや彼のフォイデラトイ師団長への任命については別の箇所にて言及している（注（9））[23]）

---

(22) 民族名の列挙はミカエル書簡，『続テオファネス』さらにゲネシオスと数が増加する。よって内容の信憑性には慎重であるべきだが，シニェス=コドニェルは東方諸民族に注目するという趣旨のもとで，個別に各民族の加担可能性を確認していく。cf. Signes Codoñer, *The Emperor Theophilos and the East, 829-842,* pp.196-200.

(23) なお，シニェス=コドニェルやアフィノゲノフは『続テオファネス』第 1 巻 21 節 ↗

3. 若干の考察

前章では『続テオファネス』とゲネシオスの『皇帝列伝』におけるトマスの出自と反乱勃発時に関連する箇所を訳出して対比した。その検討からは，主要史料2つにおいてほとんど一致点をもたないAとB，2つのヴァージョンが，反乱終結後1世紀の時点で存在していたことが確認できた。前者は反乱直後に皇帝ミカエルが書簡のなかで表明した内容とほぼ一致するが，ヴァージョンBの方はその出典はあいまいなままである。

かつてルメルルは，ヴァージョンAは皇帝ミカエル2世による政治プロパガンダにすぎないと判断した。姦通者トマスの不名誉な逃亡，その棄教とコンスタンティノス6世僭称，そしてトマス軍の侵攻への対処を誤ったレオン5世の失脚など，いずれもがミカエル2世の政権簒奪と即位の正当化をもくろむ「でっちあげ」だったというわけである。これに対し誇張や虚偽が散見されるものの，ヴァージョンBの方は歴史上本当にあった反乱勃発の姿を比較的適切に反映したものと考えた(24)。

これに対し，シニェス=コドニェルはこれらAとB 2つの伝承をともに生かそうと試みた。すでにこれまでの議論から明らかであるが，ヴァージョンAのトマスとは「逃亡者トマス」であり，ヴァージョンBのトマスは「軍人

↘ にミカエル2世がフォイデラトイ師団長であったとの記述が見られることを重視し，トマスが本職位を離れていた可能性を指摘するが（Signes Codoñer, *The Emperor Theophilos and the East, 829-842,* pp.33-40；Afinogenov, op.cit., p.330），ゲネシオスにはそのような言及はない。通説ではレオン5世治下でミカエルが占めたポストはエクスクビテス近衛連隊長とされており，私も『続テオファネス』の文面は軍人トマスの記述との取り違えが生じていると考えたい。

(24) Lemerle, op. cit., p.272-3. なお旧東ドイツのH・ケプシュタインは，ルメルル説を尊重しつつも，ヴァージョンAを完全に捨て去るのではなく，それは皇帝書簡という同時代の記述を継承したものなのだから，バイアスは大きいものの事実が見いだせるかもしれない，との点で批判を試みた。cf. H. Köpstein, Zur Erhebung des Thomas, Studien zum 8.und 9. Jahrhundertin Byzanz, in Köpstein & F. Winkelmann（eds.）, *Studien zum 8. und 9. Jahrhundert in Byzanz,* pp.61-87, pp.71-72.

トマス」で前者とは別人であったと考えたのである。

確かにシニェス=コドニェルの説明は研究の盲点を見事に突いたものとなっている。まるでミステリー小説での，名探偵によるどんでん返しの結末を見るような思いさえする。1 世紀の時間の流れの中で，2 人いたトマス（逃亡者と軍人）が次第に反乱の首謀者として融合していったというのである。実際，この時期に史料に登場するトマスという名の人物は，政治に関与した者としてはスラヴ人トマスくらいしか見当たらない。ところが両者の経歴はあまりにもかけ離れていたので，『続テオファネス』や『皇帝列伝』の編纂者たちはトマスの出自や動機などの説明に困って両者を併記した，という筋書きとなる。

けれども，歴史学での史料批判という観点からは，疑問も多く残る。まず，「軍人トマス」のその後の動向は一切不明である。おそらく，時間の経過の中でふたりのトマスが融合したため忘れられてしまった，とでも説明をするのだろう。けれども，それは史料の沈黙に依拠した都合のよい説明でもある。また，小アジアに展開するテマ軍団の中で最有力のアナトリコイのナンバーツーの地位にある「軍人トマス」が，恩人であるレオン 5 世の殺害者たちへの反抗のためとはいえ，かつての皇帝コンスタンティノス 6 世の名を騙る怪しい人物率いる異民族・異教徒の侵略軍に軽々に迎合したとはにわかには信じがたい。それは，その他のテマ軍団についても同様である。拙著においては，7 世紀から 9 世紀初頭にかけての帝国の対外関係や軍事反乱について詳しく考察を加えたわけだが，国外からの軍勢に帝国軍が呼応したような内乱はいっさい見当たらない。小アジアを中心とするテマ軍団による一連の軍事反乱の最後をかざるものという私のトマス反乱解釈と，異民族の帝国侵入という筋書きに力点を置くシニェス=コドニェルの考えとの間に整合性は乏しい。

そもそも，かつて関連する史料内容を詳しく検討したルメルルは，どうしてシニェス=コドニェルのような説明を採用しなかったのだろうか。次にこの点について確認しておきたい。つまり，なぜ彼はヴァージョン A について事実とする根拠なしとしたのか。それは，トマスの出自についての両ヴァージョンに見られる対称性にあった。

すでに前章で見たように，両史料は第1巻のレオン5世の治世記述において，トマスは主人であるバルダネスが反乱を起こした際，同僚のレオンやミカエルが皇帝側に寝返ったにもかかわらず，最後の一人となって主人に付き従ったと記している。シニェス=コドニェルによれば，これは「軍人トマス」（ヴァージョンB）についての記述となるだろう。けれども，気になるのはヴァージョンAで，トマスはエイレネ女帝の頃にパトリキオス位の主人を裏切り（妻との姦通，ないし未遂），その結果としてイスラーム圏へと逃亡したとされる。ゲネシオスでは，このパトリキオス位の主人とはバルダネスであった。つまり，トマスが主人に対してとった態度がきれいに逆転しているのである。トマスの主人に対する裏切り行為はニケフォロス1世に使嗾されたものとも書かれているが，実際には主人バルダネスを裏切ってこの皇帝の側へと態度を翻したのはレオンやミカエルの方であった。

イスラーム圏への逃亡についても，ヴァージョンAでは25年続いたとされるが，Bでは逃亡はあったかもしれないにせよ「軍人トマス」は10年ほどでレオン5世によりテマ軍団の要職に起用されている。以上から判明するのは，「軍人トマス」像と「逃亡者トマス」像との逆転現象である。

もしも叛徒トマスは一人しかおらず，しかもそれは「軍人トマス」のことだったとしたら，どのような説明ができるだろうか。バルダネスに忠実だったトマスはこの反乱が瓦解した後，イスラーム圏に逃亡したかもしれないが，レオン5世によって高位の武官職に復帰した。ところが数年後，皇帝がかつての同僚のミカエル一派によって殺害されるにおよんで，彼は弔い合戦を計画した。トマスはビザンツ国内の動乱につけ込もうとするイスラーム側の機先を制してまずシリアへと侵攻し，彼らと和平を取り結でアンティオキア総主教より加冠された。後顧の憂いを絶った後，帝国内に戻ったトマスは他のテマ軍団を味方に引き込みつつ首都へと進撃した（もしかすると，国外に進軍した際に彼に味方する異民族が加わったのかもしれない）。

これに対し，反乱鎮圧後に皇帝ミカエル2世は自己正当化のため出来事の改竄を試みた。主人であるバルダネスを裏切ったのは彼の方だったのに，トマ

スをキリスト教を棄てて改宗した変節者扱いした。レオン 5 世即位後にはトマスが帝国軍人に復帰しているにもかかわらず，25 年間ずっと逃亡したままだったとした[25]。イスラーム教徒の侵入計画を察知して彼が一時シリアに進軍した事実も利用され，トマスの活動をイスラーム教徒や異民族を率いての外部勢力としての侵攻であるかのように見せかけた。そして，反乱軍の主力を構成したであろう小アジアのテマ軍団の多くの支援という事実は，これを完全に無視したのである。

やはり，叛徒トマスが 2 名いたというシニェス=コドニェル説には無理があるように見える。この内乱をテマ反乱によるものと解釈する私としては，40 年近く前の分析ではあるがルメルルの史料解釈を支持したい。

お わ り に

シニェス=コドニェルの「ふたりのトマス」説が説得力に乏しいとしても，ルメルル説ですべての問題が解決するわけではない。ヴァージョン A にあるトマスがコンスタンティノス 6 世を僭称したとの情報はどう処理したらよいのか。聖人伝関係の史料が伝えるイコンをめぐる態度の問題や養子にしたコンスタンティオスの話題もある。さらに，より信用度が高いとしたヴァージョン B では，東方の多くの諸民族が列挙される。シニェス=コドニェルは詳しく検討して確認しようとしているが，元はミカエル 2 世の書簡（ヴァージョン A）に見られた情報であり，これらはどのような関係にあるのか。残念ながら現時点では何らコメントすることができない。

一方，反乱がレオン 5 世の治世末に起こっていたという主張は，本稿で取り上げていない史料なども活用しつつ推定されている。それだけに，もしもこちらが真実であるとすれば，反乱の勃発については別のストーリーが必要となるかもしれない。とはいえ，反乱の発生時期に関する言説としてミカエル 2

---

[25] 「逃亡者トマス」が 25 年もイスラーム圏内に滞在した後，どうしてレオン帝の治世末に進撃を開始したのかも不明である。

世政府の公式見解が広く流布していた，との可能性も消すことはできない。ヴァージョン A が「こちらがより信憑性がある」と 2 つの伝承に優劣をつけているにもかかわらず，両方の史料ともにヴァージョン B をあわせて記載している点などを加味して，本稿ではルメルルの推測に従い，史料では優先されていない B の方こそが事実を反映している可能性が高いとの判断を下した。

最後に，さらに推測の枠を今少し広げてみるならば，第 2 章で検討した『続テオファネス』とゲネシオス『皇帝列伝』での 2 ヴァージョン併記という珍しい記述からは，次のようなストーリーを考えたくなる。すなわち，スラヴ人トマスによる 3 年におよぶ大反乱から 100 年あまりが経過した 10 世紀中頃，王朝の交替などもあったにもかかわらず，この出来事についてはミカエル 2 世政府による公式見解が主流となっていた。けれども，反乱終結後には，このような状況に不満を抱く人々が存在した。それは軍隊内の言い伝えなのか，反乱にかかわった地方住民の間での伝承なのか，それははっきりしないが，大規模な内乱の本当の原因が隠蔽され，本来の軍人トマスが歴史から抹殺されることに異議をとなえたのである。すなわち，叛徒として非業の死を遂げたものの，命をかけて主人であるバルダネスに最後まで忠節を貫き，恩人であるレオンに義理立てをして蜂起した軍人，これこそが真のスラヴ人トマスの姿なのだ，と語り継いだのではないか。

残念ながら，以上はまったくの推測にすぎない。ではあるが，このように考えたとき，トルコ人バルダネスに関するフィロメリオンの隠修士による予言の伝説が，ゲネシオスや『続テオファネス』の冒頭部に登場する理由が明らかとなるかもしれない。800 年頃，アナトリコイ将軍のトルコ人バルダネスが，アルメニア人レオン，アモリオンのミカエル，そしてスラヴ人トマスを引き連れて，テマの首邑に近いフィロメリオンに隠遁する修道士を訪ね，自らの帝位獲得の可能性を問うた物語である。この時，隠修士は帝位獲得の野心を抱く将軍に予想外の返答をした。すなわち，主人であるバルダネスと彼に忠実なトマスは皇帝になれず，反乱は失敗する。これに対して，主人を裏切った残りの 2 名は帝位につく。ただし，両名は最後には争って片方が殺害される。帝国の軍

人である叛徒トマスに関する伝承（ヴァージョン B）が生き残ったこととフィロメリオンの伝説が語り継がれたことは，関連を有していたように思えるのである。

＊本稿は 2016 年度の科学研究費補助金（基盤研究 C：課題番号 16K03146）にもとづく研究成果の一部である。

――文学部教授――